

# 透明な力で人を動かす —無分節／分節の世界モデルより理 解された身体とエネルギーの関係に ついて—

## Controlling someone else with transparent force: the relationship between the body and the energy from the viewpoint of a philosophical framework of the Non-articulation and the Articulation

菅原 浩  
SUGAHARA Hiroshi

キーワード：気 自発動 太極拳 井筒俊彦 生氣論  
Keywords：Qi, involuntary movement, Taiji, Izutsu  
Toshihiko, vitalism

In traditional Qi-gong practice and internal martial arts like Taiji, it is assumed that mature practitioners can control someone else without touching, by qi power alone. Though such phenomena might be inconceivable by modern worldview, we argue that we can fully understand them by the philosophical paradigm of the Non-articulation and the Articulation, proposed by Izutsu Toshihiko, with a reinterpretation from the energy-centered viewpoint.

### はじめに

1980年代の後半、「気」のブームがあった。気功が初めて日本に紹介されたのもこの時期である。私が最初に気功について知ったのは、津村喬・星野稔『図説気功法』<sup>1</sup> (1984)であった。またこの頃からメディアに露出していたのは、「西野式呼吸法」で知られる西野皓三氏であった。門下にタレントの由美かおる氏を擁し、渋谷にビルを構えた西野式呼吸法は、呼吸法だけでなく、「気で人を飛ばす」という技で知られていた。そのようなことがありうるのか、当時の人は（あるいは今日も）半信半疑の状態であった。

私は実際に西野流呼吸法の教室を何度か訪ねたことがある。そこでは、教室の前に数名の指導員が並び、それぞれ十数人の順番待ちの人の列がある。順番が来た人は指導員と向かい合って互いの手首を合わせる。すると、生徒は体が自然と動き出し、体は前に向いたまま後ろへ向かって全速力で走り出す。教室の後ろの壁には大きな体育館用のマットが垂直に立てかけられており、後ろ向きに走っていった人は大きな音を立ててマットに打ち付けられるのである<sup>2</sup>。特に危険なことはない。むしろ打ち付けられる

とき恍惚の表情を浮かべる人が多い。中には、マットに打ち付けられた反動で今度は前に向かって走り出し、指導員のところまで戻り、また再び後ろに向かって走り出す、などということもあった。

これを西野式呼吸法では「対気」と呼んでおり、気の交流だとしている。私もこの対気を体験する機会があった。結論を言うと、これは決して「やらせ」ではない。実際に体が自然と動くのである。それはあたかも、磁石の同じ極どうしを接近させた時のような強力な反発力が働いて動かされるような感じである。

ただ、指導員のパワーが強いから飛ばせるのだ、というような単純なものではない。実際のところ、飛ばされる生徒の方も十分に体が緩み、気が通っていないと動き方が少ないのである。

これを嘘だと決めつけるのは、自分の世界観に合わないものを排除したいという人間の持つ根本的な保守性に基づくものである。しかし、もし今までの世界観で説明のつかない、否定しがたい経験が存在するならば、世界観の方を修正する必要があるだろう。特に哲学思想の歴史をあまり学んでいない人は、世界観というものが時代や文化により大きく変動するものであることをあまり自覚していない。ある経験があったとき、Aという文化ではそれはありえないことであり、そういう経験をしたという主張は嘘と決めつけられるかもしれないが、Bの文化ではそれは当たり前にあることであり、そういう経験はむしろ賞賛されるべきことと見なされているかもしれない。つまり私達はここで近代的世界観の相対化、あるいは拡張という問題に向き合うことになるのだ<sup>3</sup>。

最近では、相手に触れずして、あるいは全く力を入れずにただ触るだけで動かしてしまうという武術があるということは知られるようになって来ている。そのような場面を見せるDVDも複数ある<sup>4</sup>。そもそも中国武術ではそれは目標としてあるものであったし、日本においても本来の「合気」という伝統ではそうした技が追求されていたのである。伝説の武術家・佐川幸義はそれを「透明な力」と呼んでいる<sup>5</sup>。

つまり、西洋近代の物質主義的世界観の影響が及んでいないところでは、見えない力で人を動かすという経験があることが認識され、むしろ追求されてきたのである。

また、これは武術だけではなく、むしろ治療の面にも応用されている。その代表的な例が野口晴哉の野口整体における「活元」である<sup>6</sup>。これは中国の気功においては自発動功と呼ばれるものである。自発動功とは無意識の動きを呼び出して自由に動く。その中で身体にある緊張が解放されていくのである。

気功師の盛鶴延氏は次のように述べている。「病気の人は体の内部に、波動の形のよくない電磁波みたいなものが澱んで溜まっています。気功的に見るとその部分が暗く、固くなっているのが分かります」<sup>7</sup>。自発動功の目的は、自分自身の動きによって、この内側の暗い固まりを溶かして流れをよくすることだと言う<sup>8</sup>。

また、新宗教には霊動という現象があり、霊的なエネルギー（とされるもの）によって身体が不随意の振動をすることがある。この現象は通常、教義による意味づけがされているが、もともとこれは、活元や自発動などと同じく、

エネルギーが高くなった状態で自然に起きる動きであったと考えられる<sup>9</sup>

武術のように人を動かす場合も、何らかの方法で、相手に自発動を促すようなことをしているのではないだろうか。

このように、武術、気功、あるいは宗教に共通して、気とも呼ばれる一種のエネルギーの作用により身体が動くという現象があることが認められ、またそれを誘発する方法がいろいろ研究されてきたということになる。これを津村喬氏にならって「気の文化」と呼ぶこともできるだろう<sup>10</sup>。つまり、一種の普遍性のある経験の世界だという仮説も成り立つ。西野流呼吸法の対気も、武術や気功の世界からすれば特段珍しいものとは言えないのである。中国武術の達人ならば「できて当然」の事象である。(なお、日本で広く行われている太極拳ではこうした「気の文化」の文脈はほぼなくなっている。中国政府が制定した「制定拳」と呼ばれる太極拳は、気よりも外面的な形を重視し、ラジオ体操のような純粋な健康目的か、もしくはその美しさを審査するという体操競技的な方向性を強めている。こうした流れの教室で学んでも気について学ぶことはできない。気の文化として太極拳を指導できる人はほんの一握りであるのが実態である)。

私は1980年代の西野流との出会い以降、気功や太極拳を30年以上実践し、体験の地平としては「気」が存在するのは全く自明であるとの結論に至っている。つまり昔から記述されているところの、「気」の作用と言われている体験の地平は間違いなく体験可能なものである。それは「気」の作用で人が動くということを含めてである。ただ、80年代のブームから30年を経ても、それに対する解釈枠組が一般社会に共有されていないので、多くの人をそれ理解する視座を持ってない、というのが現在の状況だということになる。こうした状況を改善することが本稿の目的である。

## 1 「気」を考えるための視座——無分節／分節のパラダイム

「魔術とは、その原理を理解できていない技術のことである」という言葉を聞いたことがある。縄文人を現代に連れてきたら魔法の国だと考えるであろう。「気で人が動く」ことも、その原理が近代的な世界観に知られていないので「怪しい」と感じてしまうにすぎず、別の世界観に立てば完全に理解可能な現象である。

そもそもここで「気」について考えるための視座を確認しておこう。多くの人には「そもそも気とは本当にあるものなのか」と問う。しかしこれは、「間違った問いのしかた」である。それはどういうことか。「そもそも気とは本当にあるのか」という問いは、気というものの「実在性」を問うている。つまりこの質問の前提に、「あるものの実在性を客観的に明らかにするべきである」という考えがひそんでいる。

これはいわば実証主義的な考え方だが、そもそも客観的な世界とは本当にあるものなのか。多くの哲学ではそもそも世界の実在性を自明なものとは考えない。東洋の哲学をはじめ、近代の西洋哲学においても、世界とは解釈枠組により成立するという考え方が有力である。あらゆる事物に

はそれ自体としての実体性は存在しない。世界とは、解釈によって分節化されることによって実在性を持つようになるのだ。気という概念はそもそも近代西洋の世界観をはみ出すものであるが、それは「近代西洋的な世界の解釈枠組には存在していない概念」ということを意味する。

したがって、「気とは存在するか」という議論ではなく、「気という概念を新たに世界観に組み込むことは有益か」とか、「気という概念を組み込んだ新しい世界観にシフトすることに価値はあるか」といった視座から考えていく必要がある。

そもそも近代的世界観を規定してきたのは、いわゆるデカルト＝ニュートンの世界観と言われる、物質次元の世界が客観的に存在しているという枠組であった。医学が典型的なものだが、ほとんどの科学はこの枠組ですべて世界を説明しようと努力してきたのであった。

そもそも「気」とは中国文化における名称であるが、それに似た、非物理的エネルギーという概念は様々な文化に存在しており、インドにおける「プラーナ」、ヘブライの「ルアッハ」、ギリシアの「プネウマ」、ラテンの「スピリトゥス」、あるいはハワイの「マナ」など、世界的に存在する。古代日本では「ち」という名称があった。「かたち」「いのち」といった名詞と関連している。これらの多くの文化において、こうしたエネルギーは「生命」の概念と結びついており、全体として「生氣論」として世界を理解する枠組を持っている。生氣論とは、世界の根本は物質ではなく、一種の生命エネルギー的なものから世界が構成されているとの考え方である。ただ近代科学は生氣論を捨て、唯物論そして原子論によって世界を説明する方法を選び、それが成功を収めたため、生氣論はまるで前近代の遺物のような迷信として扱われるようになってしまったのである。

私は、現在の世界は、物質主義的な世界観（すなわち唯物論）から、生氣論的なそれへと転換する時期に来ている、と考えている<sup>11</sup>。科学で描いている世界は一つの地図ではあるが、世界の地図は無数にありうるのである。

ここで、大きな枠組として、井筒俊彦による、「東洋哲学の共時的構造化」の試みを取り上げたい<sup>12</sup>。それによれば、世界は基本的に「無分節／分節」として理解できる。つまり、根本的には無分節の世界があり、それが内部分節していったらゆる世界の事物が生ずる、という理解だ。無分節とは宇宙の根源であり、ブラフマン、タオ、法身仏などと呼ばれていたものである。ただそのみが存在するもので（哲学によってはそれすらも存在するとは言われないが）、あらゆるものはそこから派生するものである。

この無分節／分節の構造を、エネルギー論的に理解することをここでは提言したい。すなわち、究極の無分節を最も初源的なエネルギーとして見て、そこから分節してくる世界もすべてエネルギーの取る形態として見るのである。いうまでもなくこれは、主に中国文化において採用されてきた世界の見方である。

物質の世界は、このモデルによれば、分節化の展開のほぼ末端に位置する。初源的な、すべてが一である次元が忘れられ、個別性が際立っていることに特徴がある。

つまり、分節化とは物質性の増大でもある。初源の無分

節は純粋な非物質であり、精神であり、あるいはエネルギーである。また「私」とは、初源の無分節が持っている属性であり、その「私性」を、分節された存在体に分与していることになる<sup>13</sup>。これをエネルギー論的に見れば、初源のエネルギーが全宇宙的に展開していくことになる。

プラトン主義哲学には「質料形相論」という考え方があり、これは、初源を純粋な形相（イデア的な原理）、物質を質料として、その二つを極として、宇宙のあらゆるものがそれぞれ形相性・質料性を異なる比率で持っているというのである。つまり、形相100・質料0から形相0・質料100までのグラデーションをなして宇宙は展開している。宇宙にはそうした無数の階調がある。ということは、我々の住む地球物質界よりも「形相性が多く、質料性が少ない」世界が想定できる。そうすると、初源と物質界との間に無数の「中間世界」があることとなる。

このように東洋哲学（そしてプラトン哲学）の基本構造である「無分節／分節」パラダイムは、無数の中間世界というコンセプトを必然的に含む。そしてこれをエネルギー論的に捉えるならば、初源の無分節のもつエネルギーは多種多様に展開することになる。インド哲学における「鞘」（コーシャ）の概念のように、何次元にも渡るエネルギー体という考え方もそこから出てくるのである。そこでは人間も、肉体以外にいくつかの「微細エネルギー体」をもつという認識がある。質料形相論によれば、微細エネルギー体とは肉体よりも物質性が少なく形相性を多く有することになる（微細エネルギーと形相性については拙著<sup>14</sup>で詳しく論じている）。

こうした「エネルギー論的に捉えられた無分節／分節の世界モデル」は伝統文化において多く存在していた。その文化を前提として、多くの「気の文化」が展開していった。武術や治療法として伝承されているのはそうしたものである。

以下、最初の「気で人を動かす」に戻って、この現象がどのように理解できるかを考察する。

## 2 透明な力は緊張を解き放つ

まず基本的に、「無分節／分節」パラダイムのエネルギー論的展開からして、人間は多重な存在であることになる。先ほど述べたように人間の根源である「私性」は初源に由来しており<sup>15</sup>、肉体は分節過程の末端にある。それ以外に幾多の中間段階があり、それが多重な「エネルギー的身体」となっている。これらはインド哲学の「鞘」のコンセプトであるが、中国においても「気の身体」があることは自明の前提とされている。中国では「気」を「精・気・神」の三つに分けて語ることがあるが、これは分節性の差によるもので、人は精→気→神とエネルギーの次元を上げて、最終的に初源である「虚」であるところの「道」に戻る、という道筋を示している。これが「煉精化気、煉気化神、煉神還虚、還虚合道」と言われるものである。これは分節により固まっていたものをより流動的な状態に戻していくということである。

つまり私達の本質は広大無辺な無分節のエネルギーであり、その中のある凝縮された領域として身体があることになる。身体の中に精神があるのではなく、精神＝エネルギーの中の特種領域として身体があるという発想に立たねばな

らない。

ここで武術と気功治療という面から見ると、一つの仮説が成り立つ。それは、「身体をより流動性のある状態にしていくとき、普通には不可能なことが可能となる」という原理があるのではないか、ということである。流動性のある状態にしていくというのは、形相性を高めるということでもある。

盛鶴延氏は、暗く固まったエネルギーを流していくという自発動功の働きについて述べている<sup>16</sup>。気功とはエネルギーの通りやすい状態にすることによってバランスの崩れを是正し、自己治癒力を活性化するものである。これは野口整体の活元も同様である。この過程が、肉体の不随意の運動を誘発することは古くから知られてきたことである。宗教における霊動という現象も、エネルギーの変化によって引き起こされた運動を見出し、それをある教義によって意味づけたものである。しかしこういった宗教的意味づけは、現在においては無用である。それはかえって真の理解から遠ざけ、こういった現象に関する偏見を助長することとなる。

こうした運動とは、肉体の中にある深い緊張が解放されるときに起こると考えられる。そのことは、武術における応用を見るときははっきりする。

武術の達人がほとんど手を触れることなく相手を動かしているのは、相手の自発動を誘発させていると見ることができる。

きわめて高いレベルで自分自身の中の緊張を解放し、緩んだ状態を達成すると、相手の中にある深い緊張を察知し、その緊張の解放を誘発する動作を行うことが可能になる。このとき、何の力も使うことなく、相手が勝手に動き、崩れるという現象が起こる。しかし相手からすれば、深い緊張を解き放つ癒しが起こっているという見方もできる。

米国の武術研究家、スコット・メレディス氏は太極拳について次のように書いている。

「達人たちの内部エネルギーが相手を飛ばしているのではない。内部エネルギーができることは相手の緊張に作用することだけだ。相手の緊張を引き出し、そこに火を点け、その結果相手の身体が飛んでいってしまうのだ」<sup>17</sup>

これは中国武術ばかりではない。最近日本でも知られるようになったロシア発祥のシステムという武術も、これとほぼ同じ原理をもっている。システムでは身体を完全にリラックスさせることを強調する。システム創始者ミカエル・リャブコ氏の映像を見ると、自分の剣で相手の剣のどこかに触れるだけで、相手が勝手に崩れていく光景が見られる<sup>18</sup>。明らかに彼は、相手の深い緊張が見えており、それを解放させる方法が直観的にわかっているのである。

自分があるレベルまで「流動性」の状態にいられるようになると、そうした直観力が自然と身に備わってくるのではなからうか。こうした武術においては、力で対抗する練習は一切行わず、徹底的に、いかに自分の体を緩め、流動性のある状態にいられるかを鍛錬することになる。

伝説の合気の達人、佐川幸義が語っていた「透明な力」も、非物理的な力であり、人を動かすことができるものである。おそらく中国武術と同じところを見ているのであろう。こうした武術はこの力を呼び出すための訓練である。

このように気功治療（特に自発動功）と武術とは深い緊張を解放するという点で、同じ原理を異なる目的に応用しているものである。

この深い緊張とは、そもそも、無分節から展開して人間という形態になったときに必然的に抱え込んでしまう「強ばり」とも言えるものであろう（スコット・メレディス氏はこの深い緊張について、「身体的な強ばりとある種の感情あるいは非物質的エネルギーとが混ざり、入り乱れてできた毛玉のようなもの」と述べている<sup>19</sup>）。人間が物質としても存在するという性質を持つとき、流動性は制約され、極めて限定された存在となる。このときに生ずる根源的な緊張は、いわば存在論的な緊張とも言えよう。

自発動功や活元はそうした深い緊張を解放する生命のダンスの如きものだ。そして武術もその最も深く高度な瞬間においては、そのように無分節へと帰って行く運動を支援するものとなる。冒頭に紹介した西野流呼吸法も、この流れから見れば何ら特異なものではない。これは人間の可能性の中に含まれるものであることは明らかである。

### 3 「気で動かす」の本質——スコット・メレディス氏の太極拳論

次に、スコット・メレディス氏が太極拳のエネルギーについて語っていることを検討したい。理由は、私自身30年ほど太極拳を実践し、彼が書いていることを（全てではないにせよ）ある程度実際に体験しているため、信憑性のある情報と判断できるからである。また、伝統的な太極拳の達人たち自身はそのエネルギー的な体験を詳細に語るものがほとんどないのだが、彼は西洋人向きに詳細に説明しようとするので、現代日本人のニーズにも合っていると見えるだろう。特にその最初の著書『太極拳パワー』（原題 JUICE: Radical Taiji Energetics）は内容の濃いもので、実際に体験のない人は半分も理解できないかもしれない。

#### 3-1 太極拳と気エネルギー

メレディス氏は太極拳のエネルギープロセスを ARC と呼ぶ。それは、

- ①蓄積（Accumulate）は宇宙エネルギーとリンクすることを意識し、宇宙エネルギーを丹田に落とし、強化させる。
- ②跳ね返り（Rebound）はエネルギーを足裏に落とし、そこから上に跳ね返らすことを意識する。
- ③キャッチ（Catch）は必要に応じてエネルギーを足裏から手へ持ち上げることを意識する<sup>20</sup>。

彼によれば、このエネルギーは泥丸というツボ（眉間の奥、頭の中心であり、ヨーガで言うアジナチャクラ）から流れ始めて、最終的にそこに帰るということである。

彼の論点は多岐にわたるが、ここではエネルギーのレベルという点に注目してみたい。

それは「明勁」「暗勁」である。「勁」とは力のことである。中国の気の文化では、精・気・神（そして虚）という気の次元を措定するが、精は肉体の力、気と神が微細エネルギーである。これを二つのレベルに分ける。より物質に近い気エネルギーを明勁といい、より非物質的な気エネルギーを暗勁という伝統がある。メレディス氏はこれを自分

の経験から解釈している。これは私自身の経験からもある程度追認できるものである。

明勁は肉体に比較的近い気エネルギーなので、身体の中で振動が起こるような体感がある。その振動がだんだん全身に広がっていく。やがてそれが暗勁の段階に至ると、「柔らかく、ゆったりとした、深くそして温かい振動へと変わる」<sup>21</sup>。そして最終的には、「波の鼓動や振動として感じていた現象がなくなる」<sup>22</sup>。そして「エネルギーの振動もスピードを増したプロペラのように途切れのない純粋な一つの状態を作り出す。足裏から百会まで身体全体がエネルギーの場のような状態になる」<sup>23</sup>。そしてこの感覚は「身体中の細胞が純粋な宇宙エネルギーで満たされ膨れ上がる感じ」<sup>24</sup>であり、「エネルギーで満たされているはずなのに、空っぽなのだ」<sup>25</sup>と説明されている。

つまり明勁では身体の中の振動、流れとして感じられたいたものが、暗勁になるとあたかも場全体のエネルギーが変容した感覚となるのだ。

また、気の研究者・施術家である則本純佑氏も、スコット・メレディス氏とほぼ同様に、気を足裏から抜いて跳ね返りを受けるというプロセスを説明しており、そのためのトレーニング法も提示している<sup>26</sup>。太極拳研究家の真北斐図氏もほぼ同じことを著書で述べている<sup>27</sup>。

さらに則本氏は、「融合呼吸」を提唱し、気が入ってくるのと出て行くのを同時に感じるという訓練を通して、「内外に気が通り、体表の境界線が無くなったような感覚」が生じるという<sup>28</sup>。これは私も実際にやってみたが、メレディス氏の言う「暗勁」と完全に同じものではないが、似たものがあるという感覚を持った。

以上の、メレディス氏および則本氏の提示しているものは、伝統的には「煉精化気」そして「煉気化神」と呼ばれている、エネルギーの段階を上げていくプロセスに該当すると思われる。上がるというのは、無分節へ近づいていき、身体がより流動性を獲得する方向性である。これは、物質性によって生まれている身体内の緊張を解放していく過程であるとも考えられる。

#### 3-2 「気で動かす」の本質

次に、「気で動かす」ということを見ていきたい。則本氏も、「透明な力」を使って、力を入れずに相手を押せることを述べている<sup>29</sup>。太極拳ではこうした練習を「推手」と呼ぶ。お互いに手首を合わせて相手を気で動かすことを試みる。西野流呼吸法の対気も推手のバリエーションだとも言えよう。

既に見たように、メレディス氏も、またシステムのミカエル・リャプコ氏も、相手の緊張を引き出して相手が勝手に動き始めることを述べている。これは気功の自発動と同じものであることは既に述べた。決して、自分が持っている「気」を相手に「放射」して相手を飛ばすという、漫画のようなことが行われているわけではない。

気によって相手を動かすことを太極拳では発勁と呼ぶが、メレディス氏によればこれは二つに分類される。マイクロ発勁とマクロ発勁である。

彼によればマイクロ発勁はさらに二段階になる。第一は、彼が陰エネルギーと呼ぶ、相手の緊張に働きかける何かを

相手に送ることである。それによって緊張が解放される過程が始まると、それを利用して相手のある方向に誘導するアクションを行う。この第二段階は、物理的な軽いプッシュか、あるいは陽エネルギー（一般に発勁というところのことを指していることが多いが、このエネルギー自体が相手を動かすと考えるのは誤解である）、陰エネルギーのどちらかである。

彼はこの陰エネルギーの注入を Yinjection（訳語「陰透勁」なかなか巧みな訳語である）と呼ぶ。彼が「癒しに使うエネルギー」を太極拳の推手に応用していると述べているのは重要な指摘である<sup>30</sup>。気によるヒーリングの本質もまさに、緊張を解きほぐす陰エネルギーを入れることなのである。熟達した気功師が人の自発動を誘発できるのも太極拳と同じ原理である。

もう一つのマクロ発勁はさらに興味深い。これは彼が Yinfusion（訳語 陰合勁）と呼ぶものを使う。彼は、人間のまわりを包んでいるエネルギーの層（気の身体）のことを SHELL と呼ぶのだが<sup>31</sup>（Superficial Hi-frequency Energy Laminal Layer）、Yinfusion というのは、「こちらの SHELL を相手の身体が中に入るくらい厚くする。これにより、相手はこちらの SHELL の中にすっぽり入り、相手のエネルギーが無力化する」<sup>32</sup>という形で相手をコントロールするものである。要するにエネルギー体（気の身体）を融合させて一体としてしまうのである。

メレディス氏によるこれらの説明は、今まで達人が行ってきた神秘的とも見られる現象を原理的に説明したものとして貴重なものと言える。

### まとめ——エネルギーと身体の関係、生氣論の可能性

この稿で追究したのは、伝統的な気功や武術で知られる「気の作用で人が動く」という原理を、無分節／分節の世界モデルで説明することであった。今一度、それについてまとめてみよう。

力を入れずして人が動くように見えるのは、奥深くに存在するある緊張、エネルギーの凝結の如きものを解放する方向性を与えることによって、その緊張が解ける瞬間に不随意の動作が発生することに基づく。治療の場合、そうした凝結を解くこと自体が自己治癒力の強化となる。また武術はこの原理を応用して相手を無力化し、争いそのものを不可能にするものであると言える。

また、明勁から暗勁への変化は、エネルギーの次元性を高めることである。高めるというのは、より無分節へ向かう方向に行くことである。それによって存在性そのものが流動性を増す。それは、プラトン主義的な形相質料論からいえば、形相性を増大させることでもある。

そして、明勁＝気、暗勁＝神とすると、次には「虚」の段階があり、これに対応するのが伝統的に言われている「化勁」とも考えられる。ここまで来ると、禅やヨガなどで追求されている高次の覚醒状態に近いものになるとも思われる。それは初源の無分節にかなり近接した状態である。

そして、流動性を高めることは、他のものとの「融即」（participation）をも可能にすることが、メレディス氏の言うマクロ発勁の記述から言えることである。融即とはレヴィ＝ブリュールが原始文化の特徴として述べたこととし

て知られる。そこには、これを未開のもののみならず西洋近代至上主義の偏見が見られたが、これは「エネルギー体の共鳴、融合現象」と捉えれば、およそ人類文化が普遍的に持っている現象であり、エネルギー論的に世界を見る文化では当然のものとして世界観に含まれているものなのである。人間は気の身体という次元を有し、それは自分以外の他者や環境と複雑に交流しているのであるが、近代文化ではそれについての解釈枠組が欠けていたのである（メルロー＝ポンティの身体現象学や、アーノルド・ミンデルのプロセスワークは、こうした領域に踏み込もうとしているが<sup>33</sup>）。

より流動性の高い（無分節に近い）次元から見れば、物質的身体（肉体）を持つ人間は、基本的に深い緊張を有している。エネルギーが物理次元まで凝結することは必然的に何かの強ばりを持つ。従って、肉体が存在するうちは完全に強ばりのない状態になることはできない。しかしそれでも、可能な限りの「最適化」は可能であり、人間は現状よりも流動性の高いエネルギー状態で存在できるという可能性を持つと考えられる。気功治療の究極の目的はそれであり、また武術においても、「武」という字が「戈を止める」であるように、対立の無力化により争いをなくすという意味で、「世界の癒し」となりうる可能性を持つのである。

気で動かすことに想念のあり方が密接に関係していることは則本純佑氏も指摘している<sup>34</sup>。彼によれば、利他の想念を持つとき、より気的作用は高まるという。同様のことを真仙明氏も指摘し、「感謝しつつ相手を打つとき最も強力である」という<sup>35</sup>。冠光寺流柔術という武術を創始した保江邦夫氏は、相手を愛することによって相手を無力化することを教えている。まさに「触れずして相手が勝手に崩れる」という光景に満ちたこの武術の映像<sup>36</sup>を一般の人が見れば「やらせ」としか思えないであろうが、これは愛することによって自分のエネルギー体（メレディス氏の言う SHELL）を相手のエネルギー体と一体化させ、メレディス氏の言う Yinfusion（陰合勁）の状態を作り出していると考えれば、全く神秘的なものではなく、人間の可能性の一つとして受け止めることができる。

これは、エネルギーがより高次元（無分節に近接した状態）になると、物質と心という区分が緩いものとなり、ついには融合することに関係していると思われる。利他や愛といった想念は、エネルギーの流動性を高めるのである。物心二元論的な世界の見え方は、世界の分節状態の一つであり、世界の本質ではない。身体と精神ももともとエネルギーから発しているというのが「気の文化」のパラダイムである。「気で人を動かす」という現象は、物心二元論を超越する方向性において現れるものである。それを意識の拡大だとするのも一つの言い方であろう。

「気で人が動く」ことを単なる超能力的なものとして興味本位に扱うのではなく、それを人間の可能性として捉えるとき、近代のパラダイムでは見えない人間の本質の一端が見える。それは、無分節／分節という東洋の哲学的伝統をエネルギー論的に解釈することによってはっきりと浮かび上がってくるのである。この意味で、これからの時代は「新しい生氣論」が必要とされるようになるであろう。ここでは、人間はエネルギーとして存在するものであり、エネルギーの中に身体があると理解されることになろう<sup>37</sup>。

- <sup>1</sup> 星野稔・津村喬：図説気功法，柏樹社，1984。
- <sup>2</sup> ミカエル・リャプコ：システマ剣術（DVD），BAB ジャパン，2015。なおミカエルという名前はロシア語の発音としては「ミハイル」に近いと思われるが、ここでは通称に従う。
- <sup>3</sup> シャーマニズムを論ずるときの問題もここにある。この現象は近代的世界観では本質的に理解できないものを含んでいるので、ともすれば「未開」とのレッテルを貼られてきた。それは文化的植民地主義の一種である。
- <sup>4</sup> たとえば、中川二三生：内勁の武術とは（DVD），BAB ジャパン，2007。宇城憲治：人間の潜在能力 氣 第一巻（DVD），どう出版，2009。保江邦夫：合気を掴む 第一巻（DVD），BAB ジャパン，2011。畑村洋数：合氣と空手の融合 氣空術（DVD），BAB ジャパン，2012 など
- <sup>5</sup> 木村達雄：透明な力・不世出の武術家佐川幸義，講談社，1995。
- <sup>6</sup> 野口晴哉：整体入門，筑摩書房，2002。
- <sup>7</sup> 盛鶴延：気功革命，コスモスライブラリー，2007。P.94。
- <sup>8</sup> 盛鶴延：同書，p.98。
- <sup>9</sup> 島田裕巳：日本の10大新宗教，幻冬舎，2007。
- <sup>10</sup> 津村喬：気功・心の森を育てる，新泉舎，1989。
- <sup>11</sup> 菅原浩：パワースポットのパワーとはいかなる意味か——生氣論の復権に向けて，長岡造形大学研究紀要，第14号，2017。
- <sup>12</sup> 井筒俊彦：意識と本質，岩波書店，1991。同：意味の深みへ，岩波書店，2019。同：コスモスとアンチコスモス，岩波書店，2019。
- <sup>13</sup> 詳しくは、菅原浩：魂のロゴス，アルテ，新装版2011。同：スピリチュアル哲学入門，アルテ，2007。
- <sup>14</sup> 菅原浩：微細エネルギー論，虹の光出版，2013。
- <sup>15</sup> この「私性」を「自我」と同一視してしまったデカルト哲学（あるいは俗流デカルト主義）が近代文化の迷妄の発端の一つである。「私性」の深みを理解していたのは、近代の神秘哲学者ルドルフ・シュタイナーである。フィヒテやニーチェも、「私性」と「自我」の区別が曖昧であった。
- <sup>16</sup> 盛鶴延：前掲書
- <sup>17</sup> スコット・メレディス（大谷桂子訳）：太極拳パワー，BAB ジャパン，2013。p.183 原著 Scott Meredith: JUICE Radical TAIJI Energetics, Amazon Service International, 2012。も参照した。
- <sup>18</sup> ミカエル・リャプコ：前掲DVD。
- <sup>19</sup> スコット・メレディス：前掲書，p.183
- <sup>20</sup> スコット・メレディス：前掲書，p.63
- <sup>21</sup> スコット・メレディス：前掲書，p.154。
- <sup>22</sup> スコット・メレディス：前掲書，p.157。
- <sup>23</sup> スコット・メレディス：前掲書，p.157。翻訳本では原文の field を「草原」と訳しているが「場」に改めた。原著 JUICE, L.153。
- <sup>24</sup> スコット・メレディス：前掲書，p.158。
- <sup>25</sup> スコット・メレディス：前掲書，p.158。
- <sup>26</sup> 則本純佑：武道に学ぶ 楽な体の使い方 Kindle 版, Amazon Service International, 改訂版 2018。
- <sup>27</sup> 真北斐図：太極拳のヒミツ，BAB ジャパン，2017。
- <sup>28</sup> 則本純佑：パフォーマンスを上げる呼吸法，Kindle 版, Amazon Service International, 改訂版 2019。L.1771
- <sup>29</sup> 則本純佑：武道に学ぶ 楽な体の使い方。
- <sup>30</sup> スコット・メレディス：前掲書，p.198。
- <sup>31</sup> スコット・メレディス：前掲書，p.190。
- <sup>32</sup> スコット・メレディス：前掲書，p.208。
- <sup>33</sup> たとえば、アーノルド・ミンデル（青木聡他訳）：シャーマンズボディ，コスモスライブラリー，2001。ミンデルは意識的にシャーマニズム的な文化の再構築を目指している。
- <sup>34</sup> 則本純佑：パフォーマンスを上げる呼吸法，Kindle 版
- <sup>35</sup> 真仙明：転神白書 Kindle 版, Amazon Service International, 出版年不明。
- <sup>36</sup> 保江邦夫：前掲 DVD。
- <sup>37</sup> この見方は、「魂の中に身体がある」と理解するジェームズ・ヒルマンの見方と似たところがある。私達の視角では、彼の言う魂のコンセプトは非物質的なフィールド（場）であるという点でエネルギー存在としての人間と通ずるところがある。ジェームズ・ヒルマン（入江良平訳）：魂の心理学，青土社，1997。